



発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第三十六号

三月 月次祭 神殿講話

本日は三月月次祭にご参拝くださり誠にありがとうございます。
大教会長様にはこの後、ご講話をしていただきます。よろしくお願ひ致します。

生前、父が原稿を書く机の後ろに

「よくのこゝろをうちわすれとくとこゝろをさだめかけ」

と当時の兵神大教会長清水國雄先生の書かれた古く汚れた紙が飾られています。大切にしておうただったのだろうなと思えます。これは、みかぐらうたの下り目の四ツよくのこゝろをうちわすれとくとこゝろをさだめかけというおうたです。人間思案で考えるのではなく、神一条の精神でしっか

りと心を定めていくという意味ですが、きつと単独布教の時代に頂いたのであるうこのおうたをずっと忘れずにいたのだろうなと考えます。何か迷い考える時に、このお歌を指針にしたのだろうなと思います。

大教会長様は、

雅楽についてお話くだされ、更に後継者の布教の家愛知寮での布教の毎日を労われました。

そしてご自身の布教の家東京寮での経験で、今までの先輩方が声を掛けてくれたおかげで自分の天理教の話も聞いてくれた事、自分の話も次の人に繋がるはずだとお話しになり、すべては決して無駄ではないことを学んだというご自身の経験のお話をされました。

第四十二回祝梅若人会総会 報告

三月二十四日 日曜日、祝梅分教会におきまして、若人会に携わる会員十九名、教会・ひのきしんの方々十九名 総勢三十八名がつどい、総会をつとめさせて頂きました。今年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、座りづとめ、よろづよ八首を執り行い、その後は奥様から御祝辞をいただき、委員長の挨拶、記念撮影を短い時間で実施いたしました。従来通りの若人会総会とはなりませんでしたが、今年も若人会総会を実施出来たことに対して大変嬉しく思っています。これもひとえに、教会・ひのきしんの方々やスタッフの方々のご支援とお力添えの賜物です。この場を借りて深く感謝申し上げます。今年度の行事も実施することが難しい事もあると思いますが、その都度スタッフや会長様と相談し、出来ることを精一杯務めさせていただきますと思ひます。

祝梅若人会委員長 伊藤伸幸

全教一斉ひのきしんデー

4月29日(月・祝)

成人の旬 一手一つにひのきしん



布教師の 真の喜び

祝梅分教会

三代会長 高橋美津志

《後編》

越中ふんどし一つの恥ずかしい姿を私は人目にさらしたくないので足早に墓地から、小屋に向かつて帰ろうと道路に出た。すると前方から白い作業着の牛乳配達員の自転車が来る。裸の恥ずかしさで思わず目を伏せ道の角に寄ろうとした時「やあ：天理教さん」と声をかけられ、ハッと自転車の人を見上げると、その人は何日も前、にをいがけに入った家の人で、「俺の親戚も天理教をやつとるが話はなかなかいい、だが行いがなっていない、だから、俺はそんな信仰はしないんだ」など例を

あげて散々言われて閉口した、その人である。

よりによってこんな時に悪い奴に出会ったと思ったが後の祭り「どうした、その格好は：」とわざわざ自転車を降りて、そばに寄ってきた。やむなく私は意を決して青年との子細を話した。

「そうか、俺んどこへ行こう」荷台に乗せた牛乳の箱の上に無理やり裸の私を乗せて、今来た道を引き返した。ことの成り行きも知らない奥さんを急ぎ立て、自分の肌着、シャツ、ズボンを出させて、私に着せてくれ、更におにぎりを作ってくれて、小屋で待つ青年の所へ早く帰るようせきたてて送り出してくれた。

「垂垂れて袖に涙のかかる時、人の心の奥ぞしらるる」の歌の重みが痛いほど心に沁みる歩きながら人の心の温かさに不覚にも涙がこみ上げてくる。

真実の沁みたおにぎりの味を早速に小屋で青年と噛み締めてありがたくいただいた。

そしてしばらく後、青年の望む就職探しに歩く。幸いにもバタヤ小屋近くに今夜から住み込みでの話が決まった。気がとがめながらも前科をかくしての就職である。明けて翌日の一時過ぎ、突然戸が開いた。片手に小さな風呂敷包をぶら下げて青年が立っている。

「先生、この弁当を食べてください。仕事先で弁当を開いたとき、先生の顔が浮かんで、今頃、飯を食べているだろうか、と思うと箸を取る気がないので、親方に少しの時間をもらってやってきました。俺は夜には食べられません。どうか食べてください」
目の前の弁当を見ながら私は目頭がジーンと熱くなった。

自分の頭のハエをおえない奴は他人の世話なんかとてもできないというのが一般常識、その常識を越えて神様にもたれたお蔭で今のこの喜びを見せてもらった。

「有難う、有難う。だが君こそ馴れない初めての仕事で腹も空いて

いるのだろう、私に構わず食べておくれ」

「せっかく持ってきたんです。遠慮しないで箸をつけてください」一つの弁当を前にして、食べる、食べてくださいの言葉を繰り返して果てしない。

「では、君の心尽くしをいただいて、二人で半分ずつ食べよう」弁当を分かち合いながら布教師の生きがいひしひしと味わった。

それから数日間、青年の将来を考え続けていた私は、このように悟った。「罪を犯して刑務所に服役し、刑期を終えて出所すれば、犯した罪の償いがもうできたと人は思うが、そうだろうか。

刑務所そのものが国民の尊い血税で建てられ営まれている以上、罪の償いとして服役していても所詮は人様のお世話になったことになると。

形の上では刑期を終えれば罪は消えるだろうが、人を泣かせ困らせ

た目に見えない悪い運命は消えないだろう。

だから出所後、今度こそは真面目になろう、更生しようといくら努力を続けても、悪い運命のある限り、いつしか又も昔の仲間に無理やりに誘われて、再び同じような罪を犯すことになる。

今はあの青年も真面目に勤めようとしてはいるけれど、喧嘩の上とは言え、人を殺した悪い運命のある限り必ずやいずれの日にか災いの種が芽生えて苦しむ日があるだろう。

運命の切りかえは人を救けて我が身助かる、天理の教への行いしかない。自分のことばかりしては、いつまでたっても運命は変わらない。

この都会には救け一条に尽くし捧げているが故に、破損の箇所も思うに任せず修理もできないで難渋している教会が多いに違いない。

そんな教会を尋ね歩き刑務所で習い覚えた大工の業で執行猶予の三年間ひのきしんをすることによって、初めて青年の悪い運命が納消できるのではないだろうか『見るもいんねん聞くもいんねん、世話取りするのは尚のこと』と教えられるが、まず世話取りする私が青年の執行猶予が切れて晴天白日となる三年と同じ三年の心定めをしよう。三年間、私は自分の身の回りの事は一切いたしません。

現在、身に余る縁談の話が二口あり、心が揺れ動いておりましたがはつきり断り、にをいがけ、おたすけにわき目もふらず勇んでつとめます」と親神様に心を固く定めた。

この私の心定めが青年の心に通じたのか、わからないまま三年間のひのきしんを定めて、数日後には今までの給金の全てを道具に変え教会めぐりのひのきしんに励んだ。

だが三年の年月は長く平坦ではなかった。青年も私も山坂を勇氣

で、いばらの道をたんのうで、齒をくいしばって無我夢中で通りきった。

だがとった年月の後振り返って考えてみると、迷いやすい二十四歳の名もない布教師と、疑いやすく道のことを何一つも知らない二十二歳の刑務所帰りの青年が、どうにかやと通りきれたのは、二人が心一つにして定めた心の真実をいじらしいと思し召された親神様、教祖様が、御自ら手をさしのべてお連れ通りくだされたからと私は信じて疑わない。

なぜなら、待ちに待った三年の執行猶予の期日が切れた日、ひのきしんで結ばれたよふぼくの娘とこの青年が晴れて結婚式を挙げる恵みをいただいたからである。

布教師の真の喜び楽しみは、物や金にあるのではない、定めた心の真実に、人の救かる姿を見て共に喜び楽しむところにあると私は思う。

布教の家愛知寮 高橋悟志

一年間の布教の家愛知寮の生活を終え四月二日に教会に戻りました。

この一年間ありがとうございました。

また、祝梅分教会でもよろしくお願ひします。



『住む徳』

☆家を建てたら

そのとたんに、病気、災難と不幸が続ぎ、
新築したことを嘆いている人がいる。

☆この場合の不幸の原因は、

あきらかに、
住む徳の欠落である。

☆というのも、信用と頭金ができれば
無理をしても家は建つ。

だが、住む徳がなければ、新家で家族なかむつまじく、
ともに元気に暮らすことはできない。

☆では、その住む徳は、
報恩感謝の真心がつくる。



都志子さん（会長長女） 出立ち
久米田和義さん（郡山大教会・北
盛分教会）さんとご縁があり三月
月次祭の後、信者さんにご紹介を
致しました。五月入籍とのこと。
おめでとうございます♥

あとがき

美津志会長さんの「布教師の真の
喜び」を読ませていただいた中
に、刑期を終えただけでは運命は
変わらない。運命の切り替えは
「人を救って我が身たすかる」

天理の教えの行いしかない。と、
ありました。

私も知らず知らずの内に徳を失う
ような事をしてしまい、子供達に
それが現れてきて悩み苦しんだ時
がありました。

その時、美津志会長さんから「こ
の子達には徳がないんだよ…」

と、お悟しいただいて自分のして
来たことで子供達に辛い思いをさ
せてしまった事に気づくことが出
来ました。それから心定めをさせ
ていただき実行していく中に、大
きな御守護の姿を見せていただく
ことが出来ました。

それは親神様、教祖が御自ら手
さしのべてお連れ通りくださった
からに違いありません。

「よくのころをうちわすれ
とくとところをさだめかけ」